

カント倫理学における可想界の概念

中村 涼(早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程)

本発表は、カント倫理学において「可想界」という概念がもつ内実と、この可想界に属するとされる人間の存在性格について、主に『実践理性批判』(1788)第一部、第一篇「純粹実践理性の分析論」(以下、「分析論」と表記)のテキストを基にした検討を行うものである。

感性界(現象界)に対して可想界を想定するカントの思想は、私たちの世界把握の仕方から乖離した形而上学的、物自体的な存在者の集合を想定しているかに見えるという点で、従来批判的となってきた。このような背景を踏まえつつ、カント哲学、特に倫理学における可想界の概念の内実を正確に取り出すことはもちろん、可想界の概念が私たちの実践的思惟において無意味なものではなく、重要な役割を果たしていることを明らかにするのが本発表の目標である。このために第一に、可想界の概念を、これに対置される感性界(現象界)との対比のもとに考察する。それぞれ二つの世界と私たち人間との関係をいかに理解するべきかについて、先行研究を用いて論じる。第二に、可想界に与えられる「超感性的自然」および「原型的自然」という名称を手がかりに、自然原因としての自由がもつ、道徳法則と人間の意志作用への関係について論じる。これによって、〈道徳法則の意識が、可想界への展望をひらく〉というカントの主張の意味を、理解可能なものとして提示する。以下に、より具体的な研究発表の背景と内容を述べる。

カントは『実践理性批判』において、道徳法則の意識が私たちに与えられているという「純粹理性の事実」(V30)を根拠にして、純粹理性の原因性としての自由の演繹を行う。この演繹をまっぴらして、『純粹理性批判』(1781/1787)では蓋然的に想定されるに留まった超越論的自由が、実践的な観点においてだけではあるが、意志を直接に規定する原因性として客観的実在性を獲得するのである。この超越論的自由の正当化によって、道徳は空虚な幻想となる道を免れ、カント倫理学そのものもこの自由を柱として存立することができる。

さて、カントはこの自由による原因性の概念が、有限な理性的存在者である人間を「物の可想的秩序の中へ置き入れる」(V42)と述べている。私たちの意志は感性界に属するものとしては自然必然的な法則に従っている。この感性界における一切の変化は、原因と結果との必然的な連結、つまり自然的な原因性の力学的法則に従って生起し、あらゆる現象は時間と空間において、他の原因によって条件づけられている。これを踏まえた上で、上の引用箇所ではカントは、この感性界に加えて「物の可想的秩序」すなわち可想界にも私たちの意志が属することを主張している。すなわち、この考え方に従えば、私たちはある一つの行為の結果に対して、それを生起させる二つの原因性を想定するということになるだろう。一つの結果に対する、この二つの全く異なった原因性をいかに考えるべきか、これが本発表で第一に検討すべき点である。カント研究においてこの二つの原因性を理解しようとする際には、意志の自由と因果的決定論が両立可能かどうかという点がたびたび問題とされてきた。この点に関する様々な立場、すなわちこれらが両立可能であるとする立場(Horstmann, 1997; Horn, 2002)や、両立不可能であるとする立場(Allison, 1990)、あるいはこれらの対立を解消しようと

する立場(Wood, 1984; Bojanowski, 2012)等の参照を行い、これらの説を『実践理性批判』『分析論』におけるカントの論証方法に沿って検討していく。

第二に考察すべき点は、感性界のみならず可想界にも属するとされる人間の存在性格について、これを人間主観に与えられる道徳法則の意識との関係から明らかにすることである。上に述べたような、可想界と感性界の両方にまたがる存在として、有限な理性的存在者である人間の在り方はいかに捉えられるべきだろうか。この点について、カントが用いる「原型的自然」と「模型的な自然」という概念の検討を通じて考察を行う。カントは、「分析論」第一章において、感性界と可想界(悟性界)という区分に対応させ、それぞれの世界に「感性的自然」と「超感性的自然」という名称を与える。ここでカントはこの両自然について、悟性界(超感性的自然)を理性性においてのみ認識される「原型的自然」とよび、これに対して感性界(感性的自然)を「模型的な自然」とする。このように、悟性界が感性界の「原型」とされたときにカントが考えているのは、超感性的自然の法則としての「道徳法則の形式」を、感性的自然に(原型として)与えるということである。この際、感性的自然に道徳法則の形式を与えるというはたらきは、たんに道徳法則を表象するというだけではない人間の意志作用のはたらき、とくに道徳法則として妥当する格率をみずから採用するというはたらきに基づいていると考える。したがって、このような観点から、道徳法則の意識とそれに基づいて格率を採用するという主観的な意志作用に即して、感性的自然と超感性的自然の関係について考察を行う。さらに、カントが道徳法則は「英知的世界における原因性の法則」(V47)であるとも主張することを踏まえ、可想界と道徳法則との分かれがたい関係について考察する。

カントは「分析論」を締めくくる際に、この第一篇の成果の一つは「純粹実践理性が道徳法則によって私たちに与えるすばらしい展望」(V94)として可想界を有意義に提示したことを挙げている。本発表の考察でもって、この可想界の豊かな内実と、そのような世界の一員たり得る人間の存在性格について、カントがどのように考えていたのかを明らかにすることを目指している。

注記(一):カントの著作からの引用に関して、アカデミー版カント全集(Kant, Immanuel, *Kant's Gesammelte Schriften*, herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, 1900f.)の巻数と頁数を示した。

注記(二):要旨において言及した参考文献を以下に示す。

- Allison, Henry E, *Kant's Theory of Freedom*, Cambridge University Press, 1990.
- Bojanowski, Jochen, „Is Kant ein Kompatibilist?“ in *Sind wir Bürger zweiter Welten?*, Brandhorst, Hahmann, und Ludwig (Hg.), Hamburg, 2012.
- Horn, Christoph, „Wille, Willensbestimmung, Begehrungsvermögen“ in O. Höffe (Hg.), *Immanuel Kant: Kritik der praktischen Vernunft*. Berlin, 2002.
- Horstmann, Rolf-Peter, „Welche Freiheit braucht Moral?“ in Horstmann (Hg.), *Bausteine kritischer Theorie. Arbeiten zu Kant*, Mainz, 1997.
- Wood, Allen, „Kant's Compatibilism“ in Wood (Hg.), *Self and Nature in Kant's Philosophy*, Ithaca, London, 1984.